

第17回 ユネスコスクール 全国大会

報告書

ユネスコスクールの目指す教育と学び
— 2023年ユネスコ教育勧告から考える —

開催日 / 2025.12.6

会場 / 上智大学 四谷キャンパス

- 【主催】 文部科学省、日本ユネスコ国内委員会
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
- 【共催】 上智大学
- 【後援】 ASPUnivNet (ユネスコスクール支援大学間ネットワーク)



目次

大会概要	03
当日プログラム	04
各プログラムの報告	06
1. オープニング	06
2. 基調講演	06
3. パネルディスカッション	06
4. ユネスコ活動関連団体等からの支援メニュー紹介	07
5. ポスターセッション	08
6. 分科会	14
第1分科会	15
第2分科会	16
第3分科会	17
第4分科会	18
第5分科会	19
7. 分科会報告及び総括	20
8. クロージング	20
データ	21
フォトギャラリー	27

大会概要

1. 大会テーマ **ユネスコスクールの目指す教育と学び** — 2023年ユネスコ教育勧告から考える —

2023年11月にユネスコで採択された「平和、人権、国際理解、協力、基本的自由、グローバル・シチズンシップ及び持続可能な開発のための教育に関する勧告(2023年ユネスコ教育勧告)」を手掛かりに、国際社会が目指すべき未来と、その実現のために求められる教育の在り方について考える。ユースや教員、ユネスコスクールに携わるすべてのステークホルダーが共に教育の在り方を考え、主体的かつ協働的に未来を切り開いていく手段を模索する、学びと対話の場とする。

2. 目的

ユネスコスクールネットワークの活性化と活動の深化に資する情報収集・共有の促進を図る。特に、2023年ユネスコ教育勧告の内容について理解を深め、「世界とつながるユネスコスクール」として今後どのように教育活動に取り組んでいくかを共に考える機会とすることを目的とする。

3. 日程・会場

日時 / 2025年12月6日(土) 10:00～17:00
会場 / 対面会場：上智大学 四谷キャンパス
オンライン：Zoom配信

4. 対象者

ユネスコスクール関係者(教職員、児童生徒)、一般幼小中等学校等教員、教育行政関係者(教育委員会等)、教育研究等関係者(大学、研究所等)、教員志望者(教職課程の学生等)、ユネスコ活動関係者など
その他、SDGs達成に向けた人材育成やESDに関心のあるステークホルダー(企業、報道関係者、NPO・NGO等)

5. 実施体制

【主催】 文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
【共催】 上智大学
【後援】 ASPUnivNet(ユネスコスクール支援大学間ネットワーク)

当日プログラム



本大会は、オープニング、基調講演、パネルディスカッション、ユネスコ活動関連団体等からの支援メニュー紹介、ポスターセッション、分科会、分科会報告及び総括、クロージングから構成された。午前の全体会では、基調講演及びパネルディスカッションを通じて、2023年ユネスコ教育勧告の趣旨や意義について理解を深めた。午後のプログラムでは、ポスターセッション及び分科会を通じて、ユネスコスクールにおける教育実践の共有と参加者間の意見交換を行った。

時間	内容
9:30-10:00	受付／入室
10:00-12:00 (120分)	全体会 <ul style="list-style-type: none"> - オープニング 小林美保 (文部科学省 国際統括官付国際戦略企画官) 生田目裕美 (文部科学省 国際統括官補佐) - 基調講演 / 杉村美紀 (上智大学 学長) - パネルディスカッション モデレーター / 谷垣徹 (次世代ユネスコ国内委員会 委員) パネリスト / 杉村美紀 (上智大学 学長) 京都外大西高等学校 (生徒) 広島県立広島国泰寺高等学校 (生徒) 東京都多摩市立連光寺小学校 (校長) - ユネスコ活動関連団体 支援メニュー紹介 ユネスコスクール事務局 (ACCU)、日本ユネスコ協会連盟、 日本ジオパークネットワーク、日本自然保護協会
12:00-13:15 (75分)	休憩・移動 (ユネスコ活動関連団体 個別相談コーナー 12:00-12:30)
13:15-14:00 (45分)	ポスターセッション 希望するユネスコスクール加盟校、加盟申請中の学校
14:00-14:15 (15分)	休憩・移動

14:15-16:15	(120分)	分科会 ① カード型教材『わたしたちがつくる平和・人権・持続可能な開発』を活用して学ぶ 2023年ユネスコ教育勧告 ハイブリッド ② Building Harmony through Diversity –あなたにとっての国際交流– 対面 ③ 未来をつくる国際交流 –日本発・平和と国際交流の新しいカタチ– ハイブリッド ④ 地域のリソースを活用したユネスコスクールの教育活動と ASPUnivNet の支援 ハイブリッド ⑤ AI時代におけるESDの可能性 –ESD大賞受賞校と大学の実践をとおして– (第16回ESD大賞授賞式) ハイブリッド
16:15-16:30	(15分)	休憩・移動
16:30-16:55	(25分)	全体会 分科会報告 報告 / 各分科会代表
16:55-17:00	(5分)	クロージング - クロージング映像 法政大学坂本旬ゼミ学生制作 - 閉会挨拶 大安喜一 (ユネスコ・アジア文化センター教育協力部長)



各プログラムの報告

1. オープニング

大会冒頭では、主催者による開会挨拶が行われ、本大会の開催趣旨及び2023年ユネスコ教育勧告を踏まえた本大会の位置付けについて説明がなされた。



開会挨拶 小林美保

文部科学省 国際統括官付 国際戦略企画官
(日本ユネスコ国内委員会事務局次長)



文科省による説明 生田目裕美

文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐
(日本ユネスコ国内委員会事務総長補佐)

2. 基調講演

基調講演では、「教育を支え、教育が育む平和の文化と人間の尊厳 ー持続可能な社会実現に向けた 2023年ユネスコ教育勧告からのメッセージー」と題し、教育が平和の文化及び人間の尊厳の形成に果たす役割について講演が行われた。

2023年ユネスコ教育勧告のゼロドラフトの執筆に関わられた杉村教授は、ドラフト作成の舞台裏や勧告の特徴について解説されるとともに、私たちが勧告から何を読み取るべきかの示唆が示された。



上智大学 学長 杉村美紀 教授

3. パネルディスカッション

「2023年ユネスコ教育勧告を私たちの学びで読み解くー『平和』をキーワードにー」をテーマとしたパネルディスカッションを実施した。次世代ユネスコ国内委員会 委員で奈良県立青翔中学校・高等学校で教員としても活躍する谷垣徹氏をモデレーターに、パネリストとしてユネスコスクールの生徒2名、ユネスコスクール校長、基調講演者である杉村美紀学長が登場し、それぞれの立場から、学校現場における学びと2023年ユネスコ教育勧告との関係について意見交換を行った。



4. ユネスコ活動関連団体等からの支援メニュー紹介



ユネスコ活動関連団体等から、それぞれの団体の概要説明および各団体が
行っているユネスコスクールへの支援メニューについて紹介が行われた。休
憩時間では各団体が参加者の個別相談に応じた。

<参加団体>

- ユネスコ・アジア文化センター（ユネスコスクール事務局）
- 日本ユネスコ協会連盟
- 日本ジオパークネットワーク
- 日本自然保護協会（日本 MAB 計画支援委員会事務局）

5. ポスターセッション

ユネスコスクール加盟校によるポスターセッションを実施した。対面参加者は会場内で発表を聞き、オンライン参加者向けには視聴用動画を配信するなど、ハイブリッド形式での実施とした。対面発表は19組(17校)、動画のみ発表は10校となった。各校の詳細は以下の通り。総勢約109名の生徒がポスター発表・動画発表に携わり、対面発表会場には約93名の児童生徒および教員が発表に参加した。



学校名	発表タイトル	発表の概要
対面発表		
1 神奈川県立有馬高等学校	総合的な探究の時間とチャレンジ力育成の実践	教員が授業に協働的な学びのプロセスを取り入れることで、生徒が主体的に学ぶ力、及び表現力の育成に効果があり、校外へチャレンジすることができる。
2 宮城県仙台第三高等学校	大堤沼公園の環境保護と利用	本校近隣にある大堤沼公園は地域住民の意見対立がきっかけで、公園化が中止された沼地である。近年再び公園化を目指す地域住民の活動が活発化し、本校生とともに公園化へ向けた活動を実施している。本研究では沼地の水質状況から、現在の大堤沼周辺の環境を把握し、公園化に向けたアセスメントを地域住民に提示できるよう活動している。
3 聖徳学園中学高等学校(教員)	夏休みの大学附属博物館めぐりとその総括	夏休みの一週間を使い中学生の希望者対象に、『大学が作る』をテーマとした、都内の大学附属博物館巡りである。2年前は『一般の』博物館巡り、昨年は『企業』施設巡り、そして今年のテーマへと、中学の3年間を見据えたプログラムである。また今年の参加者のほとんどが、全日参加をしてくれて、3年前より副テーマとして促進していた「多様性の育成」も達成できた実践報告である。
4 聖徳学園中学高等学校(生徒)	水をテーマとした探求活動の実践	本校が文科省より認定を受けた、データサイエンス科クラスの授業「理科探究」は、土曜や休日に行う野外調査・観察と、校内作業での考察と発表で評価するのが特徴である。年間の大テーマを『水』として、そこから派生した小テーマ『地下水』、『多摩川』、『浄水と下水』を地元地域で調査・見学した実践報告である。自然科学だけでなく、社会科学との両面から課題を捉え、多様性に富んだ探求スタイルも特徴の一つである。
5 おかやま山陽高等学校	「全国の高校で献血・骨髄バンクドナー登録会」の実現に向けて	本校の3年生を対象に卒業記念献血を43年間、骨髄バンクドナー登録会を13年間続けている。「全国の高校で献血・骨髄バンクドナー登録会」の開催を目指して、日本骨髄バンク説明員の資格を取得した。自校で開催される献血において、高校生に対する骨髄バンクドナー登録の呼び掛けや説明を行い、登録に対して正しい理解を深めてもらう機会を自分たちでも作れると実感した。私たちの命のバトンをつなぐ活動を全国に発信したい。

6	鹿児島修学館中学校・高等学校	みんなと生きていくために	今回の発表では、鹿児島修学館での IB校とユネスコスクールの両方であることを活かした取り組みについて発表する。また、IB的な側面や地域と関連を持った生徒の自主的な活動やユネスコスクールとしての取り組みについて発表する。
7	岡山県立矢掛高等学校	ESD×食で学ぶ持続可能な社会へのアプローチ	ESD×食をテーマに「廃棄部分ナニナルンジャ」と「Problem Solver」の2種類のカードゲームを制作。食品ロスや食の課題について楽しく学べる実践を行っている。前者は廃棄されがちな食材の活用方法を考える内容、後者は食に関する問題に対して解決策を提案する内容である。このカードゲームを継続して使用し、内容のブラッシュアップを進めながら、生徒がより深く食と持続可能な社会のつながりを探究している。
8	新渡戸文化中学校	アマリをカタマリに一卓球の余材にいのちをー	Ping-pong Block Project(新渡戸文化中学校×博展×バタフライ)とは、卓球ラケットをつくる過程でどうしても生まれてしまう余材(余った材料)を「無駄なもの」とせず、新しい素材(Ping-pong Block)として見直し、その可能性を広げていく取り組みである。中学生が自らアポを取って現地取材したことから生まれた三社共創のアップサイクルワークショップである。
9	新渡戸文化高等学校	<p>新渡戸文化高等学校 ユネスコスクール活動報告 ～地域×授業・好き・旅によるプロジェクト活動～(動画は3つ制作、対面発表は以下を1つにまとめて発表)</p> <p>3.11福島再生プロジェクト</p> <p>『支えがあるから成る-東京高円寺阿波おどり-』</p> <p>二木島が語る波と森の文化 これから私達が紡ぐこと</p>	<p>スタディツアーという校外学習で昨年11月、福島県の被災地を見て回った。その体験を元に「3・11福島再生」と名付けたプロジェクトを発足した。今夏、国立国会図書館や新聞博物館での資料収集や福島の記者へのオンライン取材などを実施した。今秋、それらの経験を基にした「福島」や「震災」、「防災」をキーワードにした発表を、中学生や高校生を対象に実施。東京の高校生だからこそ気づく視点や普及内容を発表する。</p> <p>「高円寺阿波おどりやっつとさー！プロジェクト」は、本校近隣で開催されている東京高円寺阿波おどりに着目し、地域の文化継承を目的とした活動である。高円寺地区の大規模なお祭りだが、当日の「盛り上がり」が生まれるのは、多くの方々の裏側での「支え」があるからである。普段はスポットライトが当たらない彼らの存在を多くの方に知ってもらい、地域の文化を担う情熱を写真展を中心として活動しており、その内容を発表する。</p> <p>人口減少、漁村文化、気候変動をリアルに体験できる人口197人の漁村三重県熊野市「二木島」。東京から電車で片道6時間以上かかる場所に定期的に訪問し、地域の文化継承やコロナ禍で一度は途切れたお祭りの復興を生徒がサポート。地域に根付き、毎年テーマを持ちながら、自分たちに何ができるかを問いながら活動を行っている。</p>

10	東京都市大学等々力中学校高等学校	Winged Words国際協働学習 Noblesse oblige ～誰も取り残さない社会に向けて～	オーストラリアにあるブレーマ中等教育学校と対面または ICT を用いて SDGs について主体的・対話的・協働的に学び合い、学習の成果として世界に訴えるメッセージを共同制作するプロジェクトベースの学習を行っている。今年は飢餓・不平等をテーマにフードロス・フェアトレード・学生食堂などについて、異なる文化背景を持つ海外の同世代の生徒たちと英語で議論を行い、東京都の NPO や小学校で普及活動を行った。
11	名古屋国際中学校・高等学校	海外研修における多様な交流法	シンガポール・マレーシアコースとカンボジア・ベトナムコースの2つの海外研修プログラムにおける現地の方との交流に関する実践報告を行う。名古屋国際高等学校らしい独特な交流法からそこで得られた学びは何か、自らの変容を発表する。
12	智学館中等教育学校	5年間の梅染め探究～廃棄物からの地域の魅力創造～	茨城県を象徴する偕楽園では、美観維持のため大量の梅の剪定枝が廃棄される。この剪定枝の活用を通じて地域の魅力創造を目標とし、2020年度より探究学習(PBL)で「梅染め探究」を開始した。5年間、週2時間の学習で梅の鮮やかな赤色発現を科学的に追求し、独自の染色技術を確立。昨年度より、その成果を活かし、伝統工芸との連携や収益循環モデルの構築といった社会実装を進め、水戸の新たな魅力創造に取り組んでいる。
13	不二聖心女子学院	平和を考えよう	生徒自身が運営する自主団体(同好会)が主催して高校生の考える「平和」とは、というテーマで行った、校内ワークショップおよび全国のユネスコスクール(中高)に呼びかけて行った活動の報告。
14	奈良教育大学附属中学校	園・小・中を貫く「三附属 ESD カレンダープロジェクト」	奈良教育大学の附属であるこども園・小学校・中学校はすべてユネスコスクールである。これまでは各附属がそれぞれで ESD 活動に取り組んできた。本プロジェクトでは、三附属の ESD 活動を一つのカレンダーにまとめる作業を通して、幼児期から青年期に渡ることの成長に寄り添った途切れのない ESD 活動のあり方について、共通理解をした上で、各行事や授業内容をリブランニングし、より効果的な実践へと昇華できるようにした。
15	横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校	学校全体で一緒に取り組むユネスコ活動	1～6年生が同じテーマについて朝会や、特別授業、自主学習で取り組んだ様子を発表する。扱ったテーマは平和、福祉、サステナブル、環境。本校ではユネスコ委員会の児童・教師が一緒になり、ユネスコスクールの活動をリードしてきた。そこに昨年度から PTA 有志組織「ユネスコ推進チーム」も加わった。学校と家庭で連携して日頃からユネスコ活動を意識し、学校全体で同じテーマに取り組んだことによる成果をお伝えする。
16	市邨学園 名古屋経済大学市邨高等学校	世界を繋ぐ ESD 活動～日本 ESD 賞の国内公募推薦案件～	交流と対話的学びから取り組む SDGs。ICT を活用し、国連、JICA、企業等の協力を得て、世界の難民問題・貧困問題とその解決を目指す取組について学びながら、生徒自身が協働国際支援活動を実施し、持続可能な開発目標 (SDGs) について学ぶ。

17	大阪市立大池小学校 / 大阪市小学校教育研究会 国際理解教育部	大阪市における国際理解教育推進の取り組み	本研究部は、「互いの人権を尊重し、地球上の人々と共に生きる子どもを育てる」という研究主題のもと、大阪市内の小学校で国際理解教育を推進するために、各部員が学校の垣根を越えて、授業研究会や教材の開発、教職員への研修を行っている。 本大会では、本研究部の昨年までの2年間の取り組みによる子どもや教職員の意識の変容について報告する。
18	常磐大学高等学校	私たちとカンボジアのつながり	生徒たちがカンボジアの文化や生活を学ぶ異文化理解研修旅行を通じて行ったESD活動を紹介する。カンボジアの高校生との交流やカンボジア研修旅行を実施している日本の学校との交流を通して、カンボジアに対する理解とその仲間を広げていった。カンボジアの自然を活かした土産物を製作する工房への見学を通して、その経験を活かしたワークショップを企画した。研修旅行をきっかけに生徒たちが起こした小さな変革について伝える。
19	東京都立山崎高等学校	都立山崎高等学校のホールスクールアプローチについて	本校は2022年にユネスコスクールへ加盟し、ホールスクールアプローチのもと全校的にESDを推進している。本発表では、「総合的な探究の時間」における地域連携型探究活動「山崎サミット」や「コンソーシアム会議」の実践、さらに教科外での「GREEN DAY」「世界教師デー」などの取組を通じて、生徒が地域や世界の課題を自分ごととして考え、持続可能な社会の担い手として成長する姿を紹介する。
動画発表のみ			
1	埼玉県立春日部女子高等学校	わたしたちが社会を動かす！SDGsで社会とつながる「春女総探プロジェクト」	本校の総合的な探究の時間では、13の企業・団体と連携し、SDGsを軸に社会が直面している課題の解決方法を提案・検証している。生徒は各自の興味に応じて1・2学年縦割りの13講座に分かれ、講演やフィールドワークで得た知見を基に、グループで解決策を提案する。単年度で活動を終えるのではなく、1年生が次年度下級生に引継ぎを行い、より効果的な解決策に向けて、学校全体として探究活動に取り組んでいる。
2	高槻中学校・高等学校	健康と安らぎを享受できる国際社会実現への取組 2025	本校では、「健康と安らぎを享受できる国際社会の構築を目指して」をテーマに、環境・食・健康の観点から探究を進めている。カカオハスクや果物ポマースの再利用、キエーロを用いた生ごみ循環、海藻による赤土流出防止とサンゴ礁保全など、循環型社会の実践を展開。パラオでの稲作地産地消によるカーボンフットプリント削減や、高校生の睡眠の質向上をテーマとした研究にも取り組み、持続可能で健康な社会づくりに貢献している。
3	豊橋市立磯辺小学校	パートナーシティ・リトアニア共和国「パネヴェジス市」との交流をきっかけとした「国	磯辺小学校6年生は、5月に豊橋市のパートナー・シティであるリトアニア共和国・パネヴェジス市の教育関係者27名と授業や給食等を通して交流し、6月には修学旅行で大阪万博リトアニアパビリオンを訪問し、7月には豊橋市国際交流協会と「リトアニアフェア」を

		際理解・多文化共生」の学び	共催し、学習の成果を発表し、参観者と学びを共有した。こうした様々な体験をきっかけとして、「国際理解・多文化理解」の学びを楽しみながら深めている。
4	兵庫県立兵庫高等学校	効果的な防災教育について	近年、大規模災害を直接経験していない子どもが多く、防災への関心が十分に育まれていない現状がある。現在の防災教育は、形式的な学習に留まり、子どもが主体的に関わる機会が少なく、実生活への応用が難しい。そこで本研究では、子どもが興味を持ちやすく、日常生活に活かせる防災学習の方法を探ることを目的とする。防災への関心を高め、効果的な対策につなげる教育の在り方を探究することで、将来の災害対応力の向上を目指す。
5	兵庫県立兵庫高等学校	小学生にとって効果的な環境教育とは	本研究の目的は、小学生が環境問題を自分事として捉え、主体的に行動できるようになる環境教育のあり方を明らかにすることである。先行事例として、環境先進国ニュージーランドにおける効果的な環境教育の実践を調査した。さらに、出身小学校の児童を対象に事前・事後のアンケート調査を行い、環境意識の変化を分析する。今後は、実際に小学生を対象とした環境教育を実施し、その効果を考察する。
6	福岡県立城南高等学校	城南高校うみつなぎの活動報告	「城南高校うみつなぎ」という団体は、九州大学うみつなぎという海洋教育プログラムがきっかけとなって発足した団体で、海ごみの問題や環境保全に関心のある有志の生徒で構成されている。ビーチクリーンの参加・開催や海ごみを用いたアート等を作成することで、環境保全に関する啓発活動を行っている。
7	南砺市立福野小学校	福野の魅力発見ふるさと教育「第5学年の取組」	5年生は、総合的な学習の時間に「福野の魅力発見」と題し、地域のお米と里芋について学習をしている。お米は地域団体の協力の下、生産者から稲作についての話を聞き、田植えや稲刈り体験を行った。里芋は、里芋が地域で作られている理由や魅力について調べたり、生産者から話を聞き、里芋づくりに取り組んだ。そして、地域の商工会主催の祭りに参加し、地域に学習したことを発表した。これらについて子供たちの様子を発表する。
8	大阪府立豊中高等学校能勢分校	フィリピンスタディツアー	私たちは夏休みに1週間、フィリピンで海外スタディツアーを実施した。現地では植林や植樹の活動を体験し、木を育て続けることの大切さを学んだ。また、水や電気を安定して使える日本の生活がどれほど恵まれているかにも気づいた。この経験を通して、自分たちの身近な場所でも行動を起こせるのではないかと考えるようになった。発表では、その学びについて紹介する。
9	三重中学校・高等学校	海の学校～アジア海洋教育学会 2025での発表からのふり返り～	16年目となった特別授業「海の学校」の実践内容を英語にて発表をする。そしてこの授業について同級生に取ったアンケート結果から考えたことや、8月にアジア海洋教育者学会 2025にてポスター発表

			<p>を英語で行なった時に、質問や関心が集まった内容から、私たちの実践のふり返りについて発表する。</p>
10	<p>国立研究開発法人 国立環境研究所</p>	<p>生成 AIを活用した双方向 社会対話教育手法の開 発実践</p>	<p>この発表では環境問題について対話し、生成 AIを活用したオンライン教育プログラム「Kankyo Café」の紹介をする。2015年から15カ国で200回以上開催されてきた「Kankyo Café」の新しい試みとして、これまでのレイチェル・カーソン氏の発言を学習した生成 AIによる擬似的に人格を生成した「AI Carson」との双方向対話教育手法の開発と実践について、国内外の事例を共有する。</p>



6. 分科会

分科会は、第1分科会から第5分科会までの5分科会を設け、教員、生徒、関係団体等を対象に、テーマ別に実施した。各分科会では、事例発表や意見交換を通じて、2023年ユネスコ教育勸告を踏まえた教育実践の在り方や、ユネスコスクールの取組の現状と課題、今後の展望について議論が行われた。



カード型教材『わたしたちがつくる平和・人権・持続可能な開発』 を活用して学ぶ 2023年ユネスコ教育勧告

運営 担当

永田佳之(聖心女子大学/日本国際理解教育学会)

登壇者

- 元東京都立大学 風巻浩
- 東京福祉大学大学院 阿部裕子
- 横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校
平澤香織
- 兵庫県立神戸商業高等学校 藤井三和子
- 大阪公立大学 吉田敦彦
- 奈良教育大学 南雲勇多
- 伊豆市立修善寺東小学校 矢野淳一
- 京都ユネスコ協会 高見啓子

概要

※参加募
集時案内

2023年のユネスコ総会で、今後の教育に関する「唯一のグローバル基準」とも称される「2023年ユネスコ教育勧告」(略称)が194カ国の合意のもとに誕生した。その正式な標題にもあるとおり、いま重要なのは「平和と人権、持続可能な開発」であり、実際にこれらを次世代が学んでいくことがユネスコスクール等の最重要課題となっている。一般的に理解困難だと言われる国連勧告であるが、本分科会ではカード型教材を用いて勧告のエッセンスを具体的に体験し、〈自分ごと〉化するワークショップを開く。前知識などなくてもご参加いただけます。

実施 報告

半世紀ぶりに改訂された「平和と人権、持続可能な開発のための教育勧告(略称：2023年ユネスコ教育勧告)」の普及を目指して、本分科会では聖心女子大学(グローバル共生研究所)と日本国際理解教育学会が作成した「カード型教材『わたしたちがつくる平和・人権・持続可能な開発』」の新版(第2版)を活用したワークショップを開催した。第1部では「2023年ユネスコ教育勧告」の歴史的な意義、構成・内容の概説、さらには上記のカード型教材の紹介を兼ねた講義を行った。また第2部では「14の主導原則」のうち、時間的制約内で検討できる2つのカードを選び、各々に書かれた3つの問いをグループ内で吟味した。さらに第3部では、グループ内で共有された意見を全体会で分かち合い、まとめとして日本における同勧告の意義について共有した。全体会では特に若者(大学生)からの意見が注目され、国連の勧告をローカライズする際にユースの視点が活かされるべきであることを改めて認識する機会となった。3部ともハイブリッド形式で実施され、会場は40名、オンラインは34名の参加(参加者は共に出入り有り)があり、2023年ユネスコ教育勧告のエッセンスが醸し出されたような和やかな雰囲気の中で実施された。

(報告者：聖心女子大学 日本国際理解教育学会 / 永田佳之氏)



Building Harmony Through Diversity

— あなたにとっての国際交流 —

運営 担当

上智大学 大学院生 有志

登壇者

上智大学 大学院生 3名

概要

※参加募
集時案内

Building Harmony Through Diversity—あなたにとっての国際交流—は、多様性やアイデンティティ、異文化理解をテーマにした生徒向けの体験型プログラムである。発表やディスカッションを通して、文化を国旗や食べ物、祭りといった表面的なものではなく人々の価値観や習慣、人々の考え方を形づくる背景として捉え、言語や文化の違いを超えて他者を理解し、自分自身の文化的な特性にも気づく機会を提供する。多様な社会における「調和」とは何かを探り、共感と尊重をもってつながる力を育むことを目的としている。この学びを通して、異なる価値観を持つ人々が共に生きる社会の在り方を考えるきっかけとする。

実施 報告

「Building Harmony Through Diversity - あなたにとっての国際交流」をテーマに、主に中・高生を対象とした参加型プログラムを実施した。本分科会では、異なる国籍を持つ大学院生3名(ガーナ、ルクセンブルク、日本)による国や文化の紹介や国際交流・異文化体験について発表し、参加した学生同士のグループワークを通して、参加者が自身にとっての国際交流について改めて考える機会を提供した。全国各地の中学校・高校から約20名の方々が参加し、普段あまり接することのない国々に対しても積極的に関心を示し、クイズでは大いに盛り上がる様子が見られた。グループワークでは、参加者が3つのグループにランダムに分かれ、「言語の力」「文化の中の見えない部分」「文化のなかの調和」という異なるテーマについて、ミニポスターを作成した。20分間という限られた時間の中でも、中高生ならではの視点で工夫された表現が多く見られ、参加者・発表者双方にとって学びの多い有意義な時間となった。

(報告者：上智大学大学院 大学院生3名)



未来をつくる国際交流 — 日本発・平和と国際交流の新しいカタチ —

運営 担当

ユネスコスクール教員 有志

登壇者

- ・ 広島県福山市立福山中・高等学校 上山晋平
- ・ 愛知県名古屋国際中学校・高等学校 黒宮祥男
- ・ 東京都板橋区立緑小学校 市之瀬輝明
- ・ 兵庫県立舞子高等学校 壺井宏泰

概要

※参加募
集時案内

第3分科会「未来をつくる国際交流 -日本発・平和と国際交流の新しいカタチ-」では、ユネスコスクールにおける国際理解・平和・協働に関する実践を通じて、教育活動を発展させるアイデアとネットワークを創出し、日本発の国際交流教育モデルを構想する。前半は国際交流と平和教育の最新動向を共有したのち、小・中・高の3校による実践報告を行い、現場のリアルな取組を基に参加者が互いに学び合う。後半はワークショップ形式で、自校でできる国際交流の第一歩を構想し、日本から世界へ発信できる新しい教育モデルを創出することを目的とする。本分科会は、参加者がそれぞれの知見を持ち寄り、国際理解教育を深化させる場とする。

実施 報告

本分科会では、国際交流の現状と課題を共有した上で、3校の実践発表と2種類のワークショップを通じて「国際交流の新しいカタチ」を参加者全員で創出することを目指した。

冒頭、ACCU大安氏から、令和6年度のユネスコスクールを対象とした調査結果において、海外校との交流実績は35%、海外のユネスコスクール校との交流は15%以下にとどまる現状が報告された。交流開始の契機は授業上の必要性が4割を占める一方で、負担感や継続性が課題となっている。

事例発表では、板橋区立緑小学校(市之瀬校長)がオンラインツールを活用した韓国との交流、名古屋国際中高(黒宮教諭)が「教える・教わる」関係性を通じた交流、兵庫県立舞子高校(壺井教諭)が「折り鶴」や「灯笼」を用いて多国を巻き込む平和活動を紹介し、国際交流が視野と自己理解を広げる意義を共有した。

ワーク①では、負担軽減や継続の工夫、生徒主体の関わりなど、具体的な改善策が共有された。ワーク②では、スロベニア発「Wind of Peace」にならい、日本発の国際交流モデルの共創を行った。粘土での平和メッセージ、国際カレンダー、平和ソング、動画発信など、多様で創造的な案が生まれた。今後はこうした案の実現に本気で取り組みたい。

(報告者：広島県福山市立福山中・高等学校 / 上山晋平氏)



地域の資源を活用したユネスコスクールの 教育活動と ASPUnivNet の支援

運営 担当

ASPUnivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）運営委員会

登壇者

- ・ 福岡教育大学 石丸哲史
- ・ 奈良教育大学附属中学校 有馬一彦
- ・ 琉球大学 大島順子
- ・ 高知県立室戸高校 大和田彩
- ・ 信州大学 水谷瑞希

概要

※参加募
集時案内

ユネスコスクールでは、ユネスコの理念を実現するための取組やESDの実践などさまざまな活動が見られ、各学校の特徴がそこに反映されている。とりわけ地域の「ひと・こと・もの」などの資源を活用した個性ある活動が各学校で展開されており、この事例を共有することはユネスコスクールの諸活動の充実を図る上で有意義である。また、この充実に向けては、専門的知見を提供できるASPUnivNetの役割は大きいといえる。そこで、本分科会では、エコパークやジオパーク、文化財などの資源を効果的に活用した学校の取組を紹介し、ASPUnivNet各大学がこの活動にどう支援していただけるか協議していく。

実施 報告

テーマを「地域の資源を活用したユネスコスクールの教育活動とASPUnivNetの支援」としていた本分科会では、エコパークやジオパーク、文化財などの資源を効果的に活用した学校の取組の紹介と、ASPUnivNet各大学がこの活動にどう支援していただけるか協議した。エコパークをリソースとした小学校の活動に対する信州大学の支援、奈良教育大学附属中学校における文化財をリソースとした活動、高知県立室戸高校によるジオパークをリソースとした活動が紹介され、ASPUnivNetによる支援の在り方に関して協議された。フロアからは、大学内における様々な教員との連携による支援、大学間ネットワークの構築の要請があった。また、教員のみならず大学生の参画も有意義であるとの示唆もあった。ASPUnivNetとしてユネスコスクールのニーズに引き続き応えることに努めることとなった。最後に、石丸委員長より総括とともに、2023年ユネスコ教育勸告を反映した学習指導への提案がなされ、無形文化遺産への価値を見出す学習の重要性や地域学校協働活動との連携の有効性などが説明された。

（報告者：ASPUnivNet（ユネスコスクール支援大学間ネットワーク）/運営委員長 石丸哲史氏）



AI時代におけるESDの可能性

— ESD大賞受賞校と大学の実践をとおして —

(分科会・第16回ESD大賞授賞式)

運営 担当

NPO法人日本持続発展教育(ESD)推進フォーラム

登壇者

- ・ 湘南学園 住田昌治
- ・ NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
岡山慶子
- ・ 川崎市立平間小学校 武富布美
- ・ 鹿児島県立市来農芸高等学校 槇山由晃
- ・ 東京工科大学 片柳研究所長 赤津隆

概要

※参加募
集時案内

AI技術の進展は、教育の在り方に新たな可能性をもたらしている。ESD(持続可能な開発のための教育)においても、AIやICTを活用した探究的な学びや協働の形が広がりつつある。本分科会では、AI教育の実践を進める東京工科大学と2024年度ESD大賞受賞校が登壇し、ICTを活用した教育実践の工夫や課題を共有しながら、現場の視点からAI時代におけるESDの姿を探る。分科会の後半では、第16回ESD大賞授賞式を開催し、今年度のESDの優れた取組を表彰する。

実施 報告

本分科会では、「AI時代におけるESDの可能性」をテーマに、昨年度ESD大賞受賞校と大学による実践報告を通して、これからの学びの在り方について議論を行った。小学校・高等学校・大学それぞれの立場から、ICTやAIを活用した教育実践が紹介されるとともに、地域や社会とつながる探究的な学びの重要性が共有された。当日は児童・生徒の参加も多く、教員、研究者、企業関係者など多様な世代・立場の参加者が一堂に会し、意見交換を行うことで、多世代による学び合いと交流が実践される場となった。双方向での対話を重視した進行により、ICT化が進む現代においても、実際に顔を合わせて対話することの価値や、関係性の中から生まれる学びの重要性が改めて認識された。後半に行われた第16回ESD大賞授賞式では、受賞校のこれまでの取組が称えられ、参加者にとっては実践の成果を共有するとともに、今後の活動への意欲を高める機会となった。本分科会は、ESDの学びが学校段階を超えて連続し、次世代へとつながっていく可能性を実感する時間となった。

(報告者：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム)



7. 分科会報告及び総括

分科会終了後、各分科会の代表者から内容報告が行われた。(各分科会の詳細については本報告書6.分科会を参照) 報告を通じて、分科会ごとの成果や共通する課題、またユネスコスクール及び関連団体への提言等が共有され、今後のユネスコスクールの取組推進に向けた示唆が示された。



8. クロージング

クロージング映像

クロージングでは、法政大学・坂本旬教授のゼミに所属する大学生 3名に制作いただいたクロージング映像を上映した。当日の様々な場面の画像や動画が順を追ってまとめられ、参加者各々が1日を振り返る機会となった。



閉会挨拶 大安喜一 (ACCU 教育協力部長)

閉会にあたり、大安喜一 ACCU教育協力部長より挨拶があった。2023年ユネスコ教育勧告の実現には、ユネスコスクールの関係者のみならず多様なステークホルダーとの協働と学び合い、また世代を超えた対話が不可欠で、本大会がその交流と学びの場となったことが確認された。また、翌年(2026年)の日本のユネスコ加盟 75周年には、ユネスコスクールはじめ各関係者の一層の取組を通じて盛り上げて行くことへの期待が述べられた。

データ

実績

	会場	オンライン	合計
大会参加登録者数	309	120	429
当日参加者数	329	70	399
アーカイブ配信視聴登録者数※	—	—	48

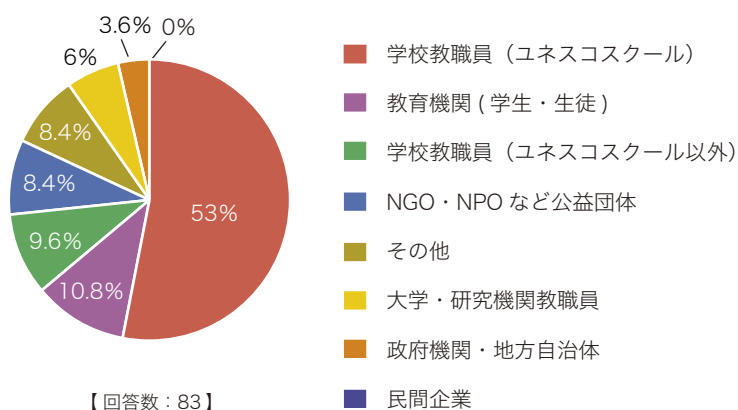
※のべ回数、2025年3月2日時点

各分科会参加登録者数					
分科会	第1分科会 (ハイブリッド)	第2分科会 (対面)	第3分科会 (ハイブリッド)	第4分科会 (ハイブリッド)	第5分科会 (ハイブリッド)
会場	40	31	27	49	84
オンライン	34	—	12	18	6
合計	74	31	39	67	90

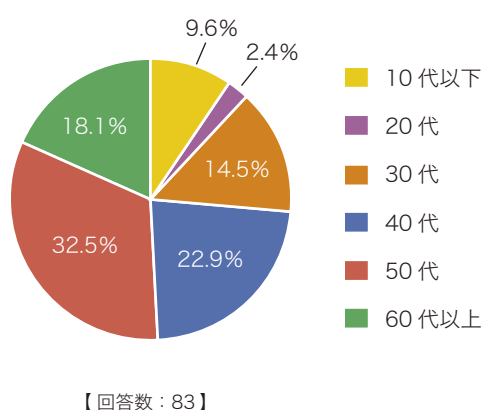
事後アンケート

第17回ユネスコスクール全国大会の参加者へ、大会後WEBアンケート調査を行った。調査期間は2025年12月6日(土)～2026年2月16日(月)、最終的な回答数は**83件**となった。※以下グラフは、端数処理の関係で内訳の和が100%にならない項目があります。

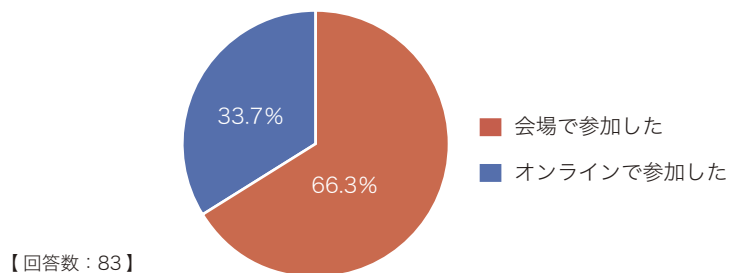
1. あなたのお立場を教えてください。



2. あなたの年代を教えてください。

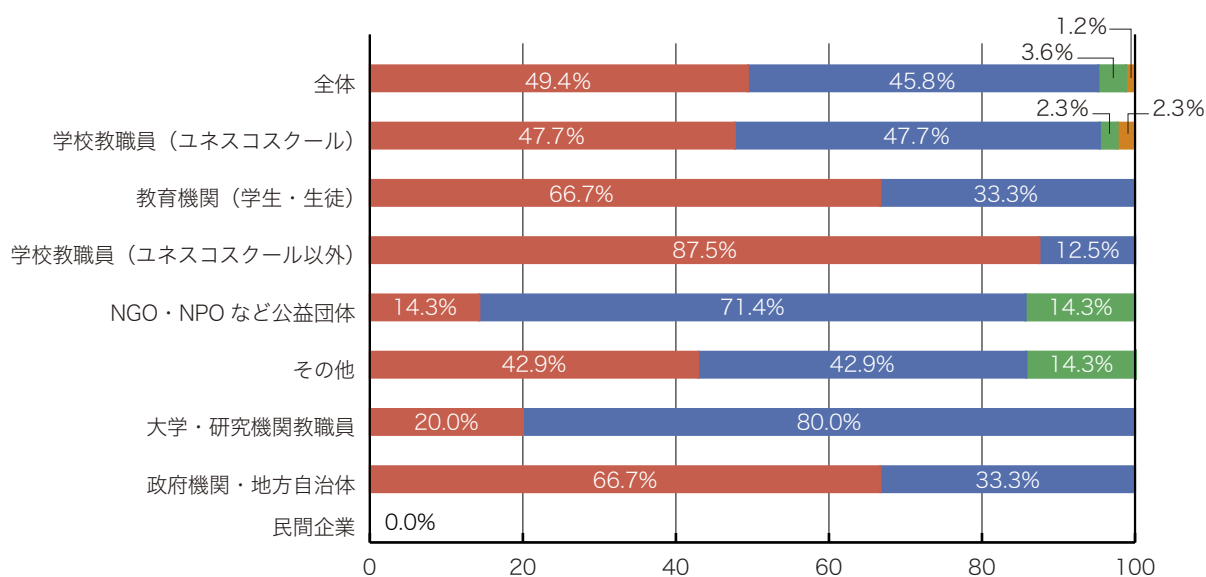
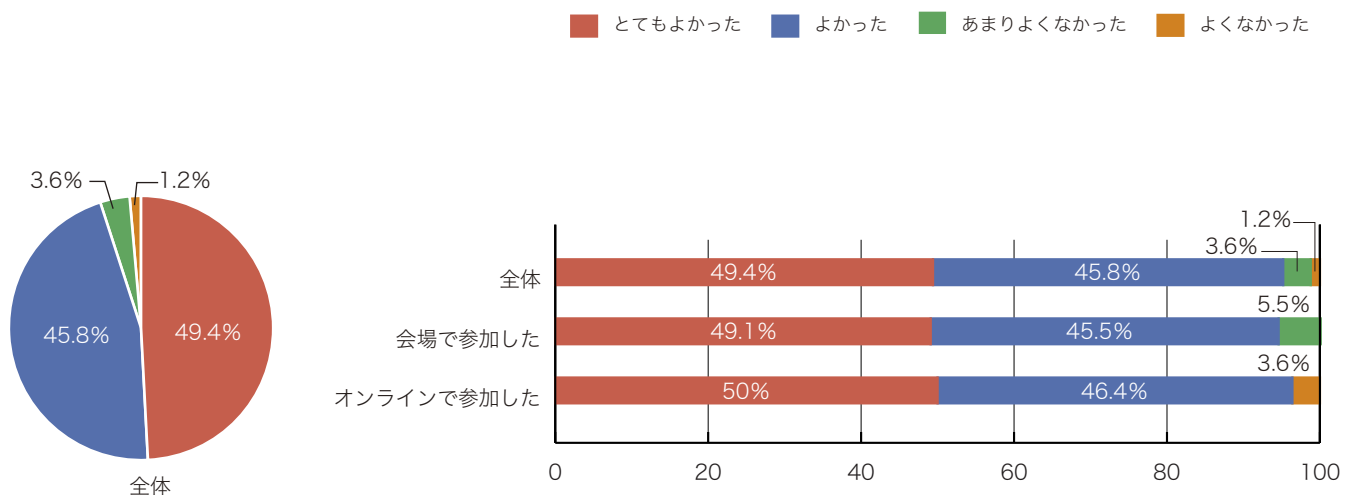


3. 参加方法をご回答ください。



4. 第17回ユネスコスクール全国大会に対する評価をお聞かせください。

【回答数：83】



5. 評価の理由を教えてください。

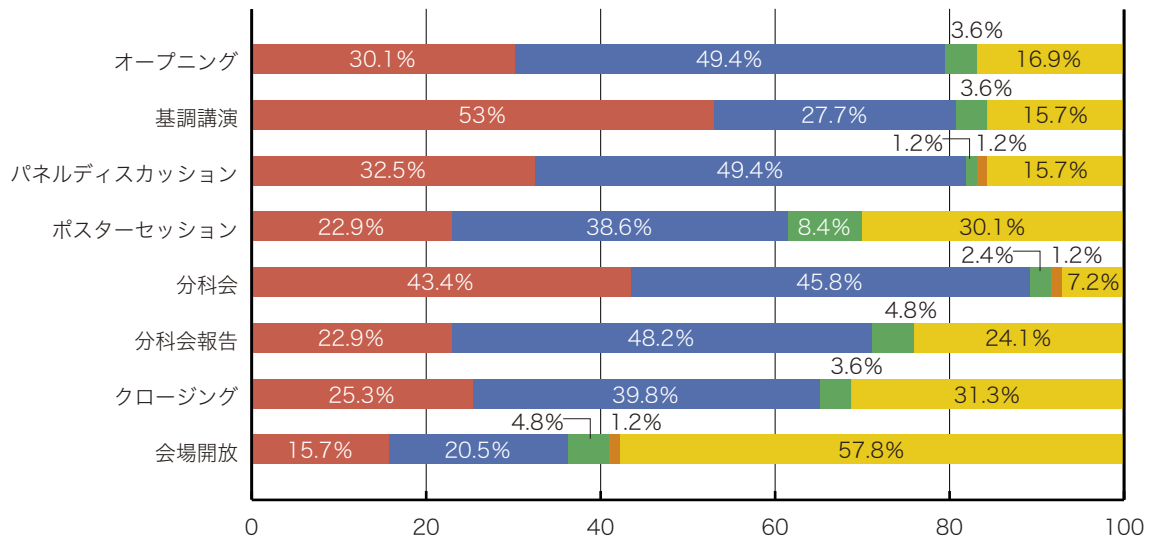
主な回答
ユネスコスクールの理念や活動について理解を深めることができた
ユネスコスクールとして何をしていけば良いか、学びが多い時間となりました。
今まであまり知らなかったユネスコについて詳しく知ることができたから
他校の先生方の取り組みや、各校の生徒たちの学びの様子を知ることができたため。
ユネスコスクールの本質の確認ができ、また今後の活動の参考になったから。
特にオープニングのユネスコスクールの状況、基調講演、パネルディスカッションと分科会の若者のプレゼンがよかった。
ユネスコスクール全国大会を通して、ユネスコ教育勧告を学ぶことができ、感謝です！
最初の上智大学学長様の話を聞いて、グローバルに動きながらも、足元もしっかり土台を作るような教育をされていて、目指すべき方向性もはっきりしていて、何より笑顔とお話になる雰囲気は素敵で、上智大学で学びたいと思った。ユネスコの下、教育について世界の人々が話し合う内容、教育観をぜひ知りたい。日本と世界の子供の違いは？ 保護者の思いや立ち位置や家庭教育文化の違いは？ 教員の立場や待遇の違いは？ 日本の教育は次期学習指導要領で示されたとしても、古い価値観から新しい価値観への変換が、教員の中で上手くいっているとは思えない。そのギャップは、教育現場で不平等感を生んだり、やる気を阻害させたりしていると感じる。ベテランが若い先生を引っ張るには、それぞれの世代のアップデートに必要な制度が整っていないように感じる。大学生や高校生がこれだけ考え行動しているのだから、もっと、日本の教育は動いていけると感じた。そんなこんなを考える良い時間だった。
会場の熱量がオンラインでも伝わってきました。
貴重な講演を聞いたこと、様々な方と「つながれた」こと。
全体的に興味深い話が多く、とても勉強になった一方、午後の分科会へのオンライン参加者はただの聴衆、オブザーバーのようになっていたことが残念に思えた。オンライン参加者ももっと交流できると良かった。
各学校のポスターセッションの発表内容がすばらしかった。ただ場所が狭いのが残念であった。
小・中・高・大の生徒・先生方の実践を聞いてとても参考になりました。
本年度ユネスコスクールに認定されたばかりの当校にとって、今回の大会は指針を得る貴重な機会となりました。他校の多様な取組や教育理念を直接伺うことで、抽象的になりがちな ESD(持続可能な開発のための教育) をどのように自校のカリキュラムに落とし込むべきか、明確なイメージを持つことができました。
先進的な考え方や全国各地の実践事例をご紹介いただき、本校の教育活動の参考になったため。
ユネスコスクールが集まり、成果を共有し合う良い機会だと感じたから。
ユネスコスクールに加盟したことを肌で感じた。
全国の先生方と意見交換をすることができてとても有意義でした。

他校の実践や、取り組みを知ることができたとともに、生徒さんたちの活動を見ることができ、自分の学校の国際教育の参考になった。また、全国の学校で取り組まれている先生方が多くいらっしゃるということが、オンラインであるが知ることができ、大変励みになった。

6. プログラムごとの評価を教えてください。

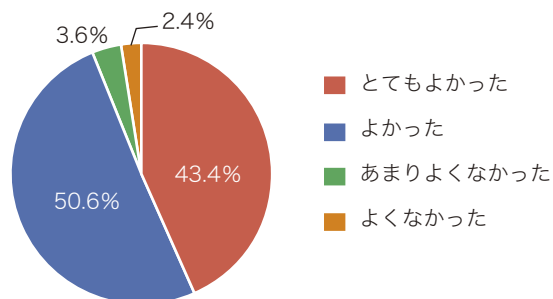
【回答数：各83】

- とてもよかった
- あまりよくなかった
- よかった
- よくなかった
- その他・参加していない



7. 参加した分科会に対する評価についてお聞かせください。

【回答数：83】



※どの分科会に対するコメントかは明示していません。

8. 評価の理由を教えてください。

主な回答
ユネスコ教育勧告について理解が深まった
様々な役割、立場の方たちと話をすることの大切さを改めて実感しました。
自分たちで考え行動するのが楽しかったです
具体的な実践例を聞くことができたため
オンラインにも関わらず、ワークショップに参加することができ、様々な方々と意見交流をすることができて良かったです。
オンラインでの参加可能でよかったが、オンライン参加者同士でのアウトブレイクセッションがあってもよかったのでは？
上智大学の院生の高校生に向けたプレゼンとグループワークでのファシリテートが良かったです。
言語、文化を通しての繋がりが学べたから。
英語で交流をし、大学院生の方のお話を聞いたのがとても楽しかった。初対面の人と話し合っ発表をしたことですごく良い経験になった。
前年度のESD大賞の入賞校のプレゼンがとても興味深かった。学びが多かった。
さまざまな学校の取り組みや有識者の意見が聞けて刺激を受けるとともに今後どのように進めていくべきかという学びにつながった。
表彰された多くの学校・団体の方々がどんな目的を持ってどのような行動を行ったのかを直接声を聞いて知ることによりSDGs解決に向けた自分達と同じ考え・気持ちを持っていること。お互いの共通点を見つけ、新しい考え方や価値観を学ぶ大きなきっかけになったため。
ESDの重要さと私たち高校生に与える影響を理解できた
ユネスコスクールとして、エコパーク、文化財などのリソースを効果的に活用している学校の取組を知ることができ大変有意義だった。
地域のリソースをどう生かすのか、また持続可能なものにするために地域学校協働活動にポイントがあるのではないかという示唆を得ることができた。
国際交流の新たなかたちについての提案・方法性を示唆する内容だった。
提案発表後、参加者が小グループに分かれてディスカッション・共同作業、発表といった活動を取り入れていただく内容になっていたから。
分科会では、ファシリテータの先生から、ファシリテーションに関しても大きな学びがあったと同時に、ディスカッションや発表に関しても、生徒達にも考えてもらいたいトピックで意味深いと同時に楽しく拝聴できた。
様々な実践を拝聴し、自校の方向性、まちづくりへの参画、学校と地域でできることの可能性が広がったからです。

9. その他、第17回ユネスコスクール全国大会に関するコメント・ご感想（今後取り上げて欲しいテーマやゲストスピーカー、参加しやすい開催時期など）がございましたらご記入ください。

主な回答
ポスター発表への参加という点では、開催時期が今より遅いほうがよいと思います
世界と日本の違いを比べながらの教育事情、教師観、保護者意識、子どもの実態など
ユネスコスクールに限らず、すべての学校に開かれる方向性が大切かと思います。
有意義な交流ができたと感じています。開催時期について、現状でもいいかなとは思いますが、要項などについて、もう少し早めに出してもらえれば幸いです。年々、出張に対して厳しくなっておりますので。また、開催場所も首都圏から地方まで広げていただければと、ユネスコスクールの活動がさらに広がりをもたせたいと感じております。
とても興味深いお話が沢山あり、他校の取り組みについて知る機会が多くあったので、今後も高校生が自校の取り組みについての発表する場を次回も続けて欲しい。
ポスター発表の会場が小さく、身動きが取りにくくて、人がぎゅうぎゅうにいたから、発表もちゃんと聞けなかった
関連団体の資料の配布をご一考いただきたいとともに、関連団体の展示については、動線やアナウンス等、改善をお願いしたいです。
学校における国際教育の方向性などを教えていただきたいと考えています。
別の分科会にも参加したい
教育行政の立場の方の積極的な参加を促してほしい
エントリーなどがもう1か月程度早ければ校内の調整がしやすい。 ユネスコスクールの規模の大きさというメリットを生かして、小中高大生の思いや成長が感じられる企画が欲しい。
今後も例年通りの11月下旬・12月上旬の実施が良いと思います。
ESD教育を行う団体や教育関係者の報告だけでなく、ユースや学生が参加できる幅を広げようとしていることは良いことだと思う。もっと、若い世代の方やユースが企画から立案して作っていただけると良いと思われる。
ASPnet校として、直接参加することは大切だと考えています。東京以外の場所での開催(関西)もあれば有難いと思っています。ご検討いただくと幸いです。
参加者同士が交流しやすい工夫をこれからも続けていただきたい
私が参加したのは土曜日ですが、北海道からでしたので仕事にも大きな影響がなく適切な開催時期であったと思います。
外国の小学校中学校の取組が知りたい。

フォトギャラリー





公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCUCO)内

ユネスコスクール事務局

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

TEL: 03-5577-2852 FAX: 03-5577-2854

URL: <https://www.accu.or.jp/>

※本報告書は、令和 7(2025)年度 ユネスコ未来共創プラットフォーム for 2030~UNESCOConnect~の一環として文部科学省の委託を受けて作成しています。